

## 日本神話と天体現象（その2）

科研費申請ニュースレターの最終号となって欲しい今回の話題は、No.2の続編です。先に取り上げたのは国生神話と北天の情景に対する勝俣隆氏の説でした。しかし勝俣氏の著作において根幹をなす問題提起は、オリオン座の三つ星＝住吉三神説と、オリオン座の全体＝アメノウズメ説、アルデバラ＝サルタヒコの右目説だと思ふのです。

### 住吉三神はオリオン座の三つ星

なかでも三つ星＝住吉三神の原像説は野尻抱影氏らが早くから説いていました（野尻抱影1977『星の神話・伝説』講談社学術文庫など）。それを再評価した勝俣説には強い説得力があると感じています。『古事記』において、住吉三神は底筒男命・中筒男命・上筒男命だと記されます。なぜ底・中・上と並び称されるのか、なぜ三神は航海に関わる神格なのか、が問われたのですが、三つ星なら東の夜空に縦並びの形で出現するから底（アルニタク星）・中（アルミラル星）・上（ミンタカ星）と呼ばれるのは自然だし、古来、これら三つ星は夜間の航海にあたり東西を指し示す指標であったというのです。北を示す四三星（北斗七星）と並び、三つ星は東と西を指し示す道標として重要な位置を占めたことが、住吉三神として神格化される由縁だというわけです。

そして勝俣氏は考察を次のように締めくくります。すなわち「結論を述べれば、天の赤道上に位置するため東西の方位を指し示す指標として相応しい点、三つ等間隔に並ぶ星の配列が分かりやすい点、二等星が三つ並ぶため光彩の面で良く目立つ点、また、海面から垂直に順番に等間隔に出てくる出現の仕方が底筒以下の名義と一致している点、現在の漁師も、土用一郎、二郎、三郎と、男性で且つ三者を兄弟の如く一まとまりとする類似した発想の名を付けている点、実際に、方言や記録において、方位を知るためのアテ星とされてきたことが明らかな点、さらには、神功皇后の西方への航海を導く点等から、総合的に判断して、やはり住吉三神はオリオン座の三つ星の神格化と解釈するのが、最も納得が行く説明が出来ると思う」（勝俣2000,123-124頁,下線は北條）と記しています。一文の長さは力の入りようを示すとみてよいでしょう。

ただし私が引いた下線部については修正が必要です。『古事記』が記された8世紀前半代やそれ以前の夜空にあって、三つ星は歳差現象のもと天の赤道から南に外れていたからです。図1には西暦694年（藤原京）の時点における奈良盆地からみたオリオン座の情景を示しました。つまり三つ星の上筒にあたるミンタカ星が天の赤道上に輝き、真東の海上や地平線から昇るのは現代のことで、それを古代に適用してしまうと実態から離れてしまうのです。

とはいえ、オリオン座が全体として東-西を指し示す指標であったことは間違いのないところでしょう。

### カノープスと老人星信仰

次は南天の情景と神話や信仰に関わる話題です。南極老人星（カノープス）の重要性について、私は天文学者齊藤国治氏の著作『星の古記録』

（1982年刊,岩波新書）から学ばされました。この星は古代中国でも周代からか、ともいわれる非常に古くから、



図1 西暦694年時点におけるオリオン座の状況（奈良盆地中央）

不老長寿や世相の安定を招く寿星と崇められ、諸王朝のもとでも祭祀の対象にもなってきたようです。この星を見ることができれば長寿になるし世は安寧、反対に見えなければ戦乱が起こるともいわれました。

有名な説話は、宗代の仁宗皇帝に招かれた背丈三尺の老人が大酒を飲み干したのちに霧消したという事件が生じた際、皇太子から前夜には老人星の位置が移動していたとの報告を受け、さてはあの老人が寿星であったのかと皇帝が喜んだというもので、七福神や福祿寿のモデルになった神格です。

また古代の日本について、齊藤氏の著作では平安時代の記録が紹介されており「延暦二十二年十一月一日（803年12月18日）は、朔の日（新月の夜-北條挿入）が偶然冬至と重なったので、宮中では慶事とされたが、さらに老人星が観察されたとの報告があり、天下の治平、天子の長寿を祝って大赦と授位とが行われた」（齊藤1982,135頁）というのです。この時の大赦は死罪の者にも適用され放免となったようですので、尋常な感覚ではなかったといわざるをえません。齊藤氏はこのような南極老人星への信仰を「老人星信仰」と呼んでいます。

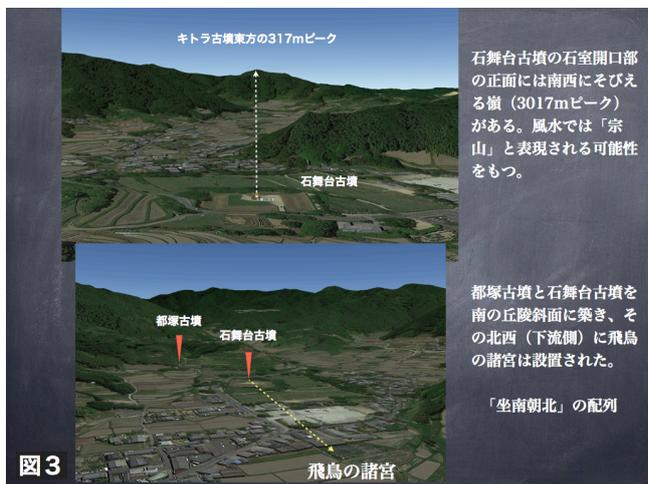
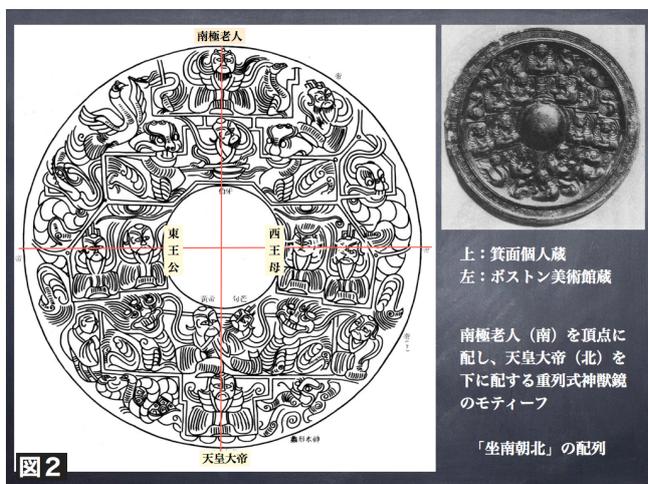
こうした南極老人星崇拜については、後漢末から三国時代に製作された重列式神獸鏡のモチーフにも注目したいと思います。図2は林巳奈夫著『漢代の神神』（1989年刊、臨川書房）からの引用図です。半肉彫の神獸鏡の多くは北天を上にした情景か、西王母と東王公を中心に据えた神仙思想のモチーフをとるなかにあつて、少数ではあつても、南の南極老人星を頂点に据えたバージョンもあることが林氏によって指摘されたのです。

古代中国の政治学的な理念方位は、鏡の図柄とも対応しており、前漢代までの古相方位「坐西朝東」（尊主は西に座り東面し、臣下は東から西面して拝礼する）と、後漢以降の新相方位「坐北朝南」（尊主は北に座り南面し、臣下は南から北面して拝礼する）だったとするのが定説です。後者については「天子南面す」の表現も有名です。

しかし別バージョンとして、じつは「坐南朝北」も老人星信仰を基盤として確固たる位置を占め、上記の二者と併存しつつ温存された可能性が濃厚であることを図2の鏡は示唆しています。

「坐北朝南」が北辰信仰もしくは天の北極信仰（天皇大帝はその神格化）であることは間違いのないところです。「坐西朝東」は西王母信仰もしくは崑崙山信仰、あるいは蓬萊山への憧憬だともいえるでしょう。それらと同等の価値を保持した祭祀に関わる方位観として「坐南朝北」があった可能性も高い、と考えざるをえません。四方の極が信仰の対象であったという図式になります。

このような考古資料の存在を考慮しながら齊藤氏の著作を読むと、日本の記紀神話にも老人星信仰の形跡が残されていてよいように思うのですが、どうでしょうか。不躰ながらこの点に関連する私案もしくは憶説を紹介させていただきます。



### 南を志向した古代日本の宮都

奈良盆地の南端に営まれた飛鳥の諸宮と藤原京の選地を風水的にみれば、どうしても南側にそびえる山並を背景に選び、その北に配置されることが主目的であった宮都だとしか考えようがないのです。定説はもちろん北辰への志向「坐北朝南」を前提とした解釈ですから、私の見解は完全な異端です。そこは承知の上で、次のような説明となります。

飛鳥の諸宮の場合には、南の山際斜面中に蘇我氏の実質的な始祖ともされる稲目の墓（都塚古墳が有力）や馬子の墓（馬石舞台古墳が有力）が築かれます。南の山-古墳-宮都の配列です。それを風水に則して表現すると、南の山（宗山）から流れ降る龍脈に沿って始祖の遺骸から発する魄（生命力）が子孫に好影響を与え続ける、そのような作用が祈念された配列だということになります（図3・図4）。

藤原京の場合には大極殿跡の南側正面に天武・持統の合葬陵があり、その南側延長線上には高松塚古墳・文武陵・キトラ古墳など帝陵級の古墳が並びます（図5）。南の山-直列する帝陵-大極殿の配置です。藤原京の配置を規定した大和三山としてよく指摘される北の耳成山の山頂は、大極殿の中心軸線より西に振れており、この直列配置には重なりません。ですから藤原京の背景をなした山並は南側だとみるのが妥当です。風水的な表現については、飛鳥の諸宮と同じ説明が適用できます。

そして藤原京大極殿から南天をみれば、秋から冬にかけての晴れた夜には南極老人星が観察できたはずなのです。図6は697年12月18日の冬至の深夜の情景をシミュレーションしたものです。南中高度は3.1°です。この時代の藤原京では、歳差現象の関係で、まだ南極老人星（カノーブス）は晴れた夜なら確実に視認可能な高度を保っていたようです。

なお飛鳥諸宮や藤原京からみた南の山並とは吉野方面のことですし、そこには吉野宮（宮滝遺跡）が離宮として設けられました。この宮滝遺跡は吉野川の北河岸段丘崖にあって、南側への眺望しか確保できない特殊な立地です。つまりこの離宮でさえ、より南方への志向性が明確なのです（図7）。吉野のさらに南には熊野が控えていますから、熊野に託された象徴性をどうみるか、が問題の鍵を握るように思います。



図4

飛鳥の諸宮（画面は板蓋宮の復元模型）は南が高く北が低い。南門から大極殿に向けて地形は6m前後下降する。天皇より臣下の者の位置の方が高くなる特異な祭祀空間である。

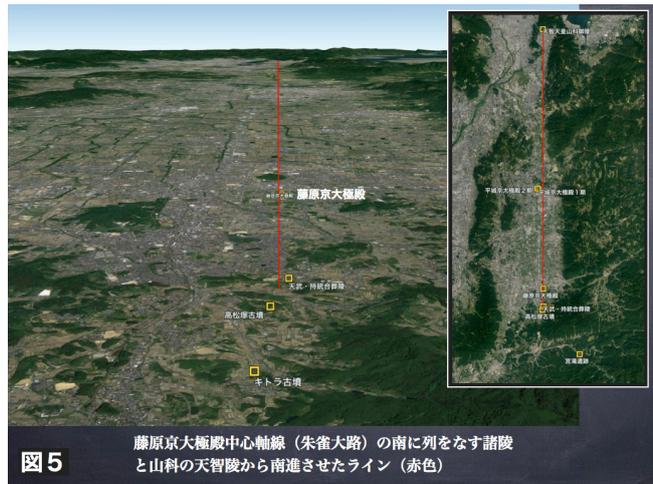


図5

藤原京大極殿中心軸線（朱雀大路）の南に列をなす諸陵と山科の天智陵から南進させたライン（赤色）



図6

藤原京大極殿中心から冬季にみえる南極老人星（カノーブス）697年12月18日（冬至）23時23分に南中（高度：3.306°）  
南極老人星（カノーブス）は冬季の南天においてもっとも明るく、寿星ともされた。



図7



図8

### 古代における南限の地熊野

そして『日本書紀』の一書には、火の神を生んで死去した伊弉冉（イザナミ）が葬られたのは熊野の有馬村だと記されています。地母神的な祖神が眠る聖なる山並は、『古事記』にいう（出雲と伯耆の境にある）比婆の山ではなく、奈良の都からみた南の最果ての山間部だった、という別バージョンの伝承があったことをこの記事は証明しています。つまり飛鳥や藤原からみた南の山並は、宗山と選定されるに相応しい聖山だったといえるでしょう。だとすれば、その上空に輝く南極老人星がこうした宗山の聖性をさらに高めるものだった可能性は高いのではないかと思うのです。

さらに『日本書紀』に登場する少彦名（スクナビコナ）は、大己貴（オオナムチ-別名を大国主）と共同して国土整備を終えたのち、熊野（御崎）から常世郷に帰ったとあります。このことは熊野が国土の最南端に位置づけられ、その先に広がる海上の果てに常世郷（常世国）があったと考えられた消息を伝えるのですが、この常世郷が南の海上に存在

したという記載と、南極老人星が不老長寿を誘う寿星だという長寿信仰とが無関係だったとも考えがたいのです。

そのうえ、宗代の記録では身長三尺（90cm）と極小柄であった南極老人と、同じく極小サイズであったとされるスクナビコナの相貌が重なります。また穂に弾かれて常世郷に帰ったとの異説をもつスクナビコナは天空を飛翔したはずですから、南天の星に喩えられたとしても不自然ではないように思います。

先に平安時代における朔旦冬至の慶事として紹介したように、この星が見えただけで大々的な大赦や叙位がおこなわれたという史実は、小彦名→南の常世郷→南の寿星→南極老人星という連想や比喩、もしくは融合が、平安時代より前のどこかで生じた可能性を想起させるのです。その有力な候補としては、南への志向性が明確な飛鳥の諸宮や藤原京、そして吉野宮が営まれた時代が浮上する、という次第です。

そして平安時代から鎌倉時代になると、熊野の那智勝浦から南方洋上にあると観念された補陀洛山を目指し、死出の船出を敢行するという「補陀洛渡海」（フダラク渡り）がありました。常世国に帰ったとされる少彦名に擬して現世からの離脱を実演する行為だとも取れるのですが、まことに切ない宗教行為です。

この問題を捉えた国文学の益田勝実氏は、「この国の極南の地は、古くから民族の〈絶望〉と〈異土に再生を求める心〉とに深く結びついていたらしい」（益田1962「フダラク渡りの人びと」・2006『益田勝実の仕事2』所収、ちくま学芸文庫、219頁）と記し、日本人にとっての熊野がもつ意味を考察しています。そのような極南の山間部である熊野の先に南方の海原が広がるわけですから、そ

こは絶望と再生祈願の最終的な収斂先だということになります。

このようにみえてくると、老人星信仰や常世国信仰にも諸相があつて、観察できただけで満足し祝う人びと、遠望しつつ祭祀をおこなう人びと、境界域にまで出向く極限的位相などに仕分けできるように思います。そして最終の位相となる那智勝浦からの船出となると、主観的には永遠の生への志向を意味するものの、客観的には死の受容です。人びとはそのことを熟知しながら、このような船出を断行し、あるいは見守ったのだと捉える必要があります。熊野や南方海上への憧憬とは、そのような絶望と再生祈願の両面性に裏打ちされたものだった、というべきかもしれません。

### 斎藤国治氏が提唱した古天文学

さて、斎藤国治氏は偉大な天文学者として数多くの研究業績を残し、古天文学を提唱した人物としても著名です。ただし晩年には、市民団体からの要望に応じて岐阜高山の山間部にある「磐座」の現地調査を行い、その成果を出版したところ、学界からはトンデモ説だとして大いに不評を買ったのだと拙著の一読者から教えられました。

いかに多大な業績を残した天文学者であっても、トンデモ説の加担者とみなされる憂き目を生前に経験なさったようです。問題の「磐座」について、地元の文化財保護行政側は今でも冷淡な態度をとっているようです。与那国沖の海底遺跡をめぐる喧噪を連想させられるかのような一件ですが、考古学的な観点からの押さえ直しが必要かもしれません。

今回の科研費申請に集っていただいた皆様とともに、古天文学の趣旨を領域横断的な組織のもとで発展させることができればなによりです。このことを祈念しつつ、5回に渡ったニュースレターを閉じることにします。お付き合いくださり、真にありがとうございました。来る2018年4月1日に結果は判明するはずです（完）。